

清水湊の名物はお茶の香りと男伊達

海道一の大親分・清水次郎長は博徒からマルチな実業家へ転身

清水港といえば、その整備に尽力した清水次郎長（本名・山本長五郎）の功績はあまり語られないためか、それを知る人は限定的だ。次郎長といえば海道一の大親分と呼ばれた「清水一家」の長で、ドラマ、映画、謡曲などで知られるが、専ら博徒集団の親分として描かれるためか、通念的には任侠世界の人物といったイメージで捉えられがちだ。

しかし、次郎長には実業家としての一面があり、その功績はあまり知られていない。文政3年に生まれた次郎長の出身地である美濃輪町は、清水湊（清水港）の新開地であり、父の三右衛門は海運業者だったことから、幼少から港湾は日常生活に密接な存在

であった。

若き日々は博打、喧嘩に明け暮れるなど、映画さながらの荒くれぶりだったが、叔父の次郎八が米穀仲買の株を持った「甲田屋」の主人であったため、



その後

は次郎長が経営を引き継ぐこととなった。しかし、荒くれた生活ぶりが変わることはなく、天保6年には喧嘩の果てに刃傷沙汰を起こしたため、無宿人となり諸国を巡行した後、清水湊で一家を構えた。

任侠史に名を残した「清水一家」の誕生である。

だが、単なる任侠集団としてはではなく、慶応4年には幕府から東海道路筋・清水港の警固役を任命された。そして明治13年に、敵対していた三河平井一家の原田常吉や雲風竜吉らと手打ちをした

ことを機に、博徒世界から足を洗い実業家としての道を歩み出す。

最初に着想したのは、静岡名物である茶のアメリカへの販路拡大で、清水港から横浜港へ大量輸送するため、蒸気船の清水港への入港を構想。それを受け容れられる規模へ拡大するため、外港整備に乗り出すとともに、横浜との定期航路線を運営する「静隆社」を設立。



パンフレット『清水湊 次郎長生家』（静岡市提供）

その一方では、子弟教育にも熱心で、国際人養成に向けて私塾の英語教育に力を入れたことも伝えられる。また、明治19年には、東大医学部別課を卒業した植木重敏と、その同郷人である渡辺良三とともに「済衆医院」を開設するなど、地域医療にも貢献した。（参考資料：静岡市提供。パンフレット『清水湊 次郎長生家』、Wikipedia）